

現代詩

カンナ

横須賀線の線路沿いには
赤いカンナが
どこまでも続いている

列車の轟音を物ともせず
毎年約束を果たすように
赤いカンナが
咲いている

男がいった
あなたはカンナのようにだ
わけを聞く間もなく
男は去った

花びらの燃える匂いを振り払い
赤いカンナは
傲然と咲き続ける

相澤陽子

ふゆのひ

おぐり あつこ

ざくざく おとのする ゆきは
きらきら ひかりをはなち とけてゆく

てのひら サイズの ゆきだるま
いえの なかは あたたかく

すこしずつ
すいてきとなって
ちいさくなってしまう

みどりいろのでぶくろ
ぬれちゃったの
ゆきだるまの命が瞬く

かわかしてしまおうと
ちよっぴりせつない
ゆきだるまの命が輝く

すいとうとほく

おぐり はるき

ロマンティックでなくていい

佐藤裕一

あつたかいものをいれると
ずーっとあつたかい
つめたいものをいれると
ずーっとつめたい

すいとうはたえている
なかみがなくなっても
ずーっとたえている

からっぽになるとママがあらってくれる

こんどは

おちやをいれようかな

こぼさないようにそそいでく
あふれないようにそそいでく

キツクふたをしめて
とじこめる ほく

ロマンティックでなくていい
公園の片隅で 互いに肩を抱きながら
甘い言葉を囁き合う

そんな時間はなくていい
朝目が覚めて カーテンを開けるととき
日の光を浴びて 眩しそうにしている
君と出会えれば それでいい

ロマンティックでなくていい
映画館で 手を握り合いながら

恋愛映画を見て 涙ぐむ

そんな時間はなくていい

夕飯のテーブルを囲んで

今日はこんなことがあったんだよと笑い合う
そんな時間が持てれば それでいい

ロマンティックでなくていい
ロマンティックでなくていい

誰も知らない

篠原貴子

幻想世界

チズコ・W・クジラ

貴方はこの大宇宙のどこから来たの。

誰も知らない。めぐり逢いそして愛を育て生きて
笑って四十四年。そして突然どこへ行つてし
まったの。あの日この世から去ることを知って
いたらもっと愛を温めて過したものを。

その時がこんなに早く来るなんて。貴方は知って
いたのですか。誠実さと心の広さで私をいつも
支えてくれた貴方。そして希望への道を語りな
がら歩むことが出来た日日。

感謝をこめてありがとう。

もう、何度目の秋が通り過ぎたことだろう。

これから残った日々。

今日が一番若いこの日

私はいろいろな事に挑戦し学びながら
希望の虹と一緒に生きてゆきます。

この世にたしかに生きたという
足あとをのこして

ここから去る日

それは誰も知らない

早朝窓を 開けると

水墨画と 見まごう景色が広がって—
フワフワした 水の粒子は横に伸びて
全ての個体を 包み込み畑の梅の木々
戸々の家 寺の銅葺きの屋根
高い松の木までも 餌食に—

ひとときわカン高く警笛を鳴らし
近づく電車は 音だけが 残り
彼方に 吸い込まれ—

気温も上がると 浄化された景色 が
何事もなかった 様に姿を現し—て
ざわざわと踏切りを通る は 学生か
遮断機をくぐり抜け 足早に渡り去る
一瞬の幻想世界は 私 いや人々への
束の間の癒し空間

だった—のか!?

プリズムと偏光板

中出隆義

プリズムに光を通せば七色に
一年を通せば四季に
人生を通せば喜怒哀楽に
そしてまたプリズムを通す
七色が光に 四季が一年に
喜怒哀楽が人生に
何個プリズムを並べても同じ繰返し
そこで偏光板を用意する
光は赤だけに 一年は春だけに
人生は楽だけになる偏光板
でも何だかものたりない
そんな偏光板を望まない
色に溢れ 四季があり
喜怒哀楽がある人生が良い
ただひとつ
世界を通せば平和だけを通す
大きな大きな偏光板があれば

夜明け前

ひまわり

夜明け前の空を見上げて
空の暗さに驚く
夜でもなく朝でもない
そのひとときが
深く 重い闇に包まれているのを知る
気がつけば
空が白み
朝が訪れる
夜明け前が
朝を運んできてくれる

正義の解体

早坂尚輝

正義とは 青信号の向こうで踊る象のことだ
いや違う 冷蔵庫に入った昨日のカレーだ
裁判官の木槌がバナナを叩いている
有罪無罪有罪無罪 ルーレットが回っている
テレビの中の正義は歯磨き粉のCMに挟まれ
て三〇秒で世界を救ってまた歯磨き粉に戻る
正義正義正義正義 言葉を百回言う
ただの音になって意味が蒸発する
善人の仮面をかぶった悪人が
悪人の仮面をかぶった善人を 裁いている
時計の針が逆回転 昨日の正義が今日の悪
正義は風船 膨らませすぎると破裂する
BANG! 何も残らない
白黒つけたがる人たちが グレーの世界で
迷子になっている 地図を逆さまに持って
正義なんてどこにもない あるのは人の数だ
けの正義 七八〇〇〇〇〇〇〇〇〇個の正義が
空中でぶつかり合っている
またあした 新しい正義が生まれる

冴えた空

みほさ

遠く眩しい空の奥
澄んだ世界に吸い込まれる
顔を上げると心が浄化される
サイダー水のように
パチパチ弾ける冴えた空
海がある街
天気によって変化する風の匂い
波の音に救われる
どこまでも続く水平線
海と空の万華鏡

目を瞑って深呼吸
毎日にどんな彩りを添えようか
どうせ生きるなら綺麗に色付けしたいんだ
冴えた空に包まれて
私は今日も必死にもがいて生きている

「流し」

村上 きょうじ

午前六時 床を出て
台所の「流し」の前に立つ
手洗い うがい 歯磨き
流れる水音はやさしい

ふと想い出す
山裾の生家の裏庭
掘り抜き井戸の横の「流し」
母が人参や大根を洗い
幼い私は横で見ている

朝昼晩の食事作り
あれこれ日に何度も
生きるために「流し」を使う
一日の終わり きれいに洗う

種をまく

山田 にしこ

花を愛でる
うす紅色のつぼみが
はにかむように開いたとき

茎をつたい
小花の蜜を集めるアリたち
やわらかい葉に穴をあけるカマキリたち
アマガエルまで
群生する藍にやってくる

こんな小さな生き物たちの
生業を

生きて在るかぎり
見続けたいと

私は種をまく